

表 7-1 平成 13 年度 調査 計画 (案)

地 域	平成12年度調査成果	目 的	種 別	数 量	備 考
A 八郎潟北岸地区	《能代断層本体》 ・ 八郎潟北岸で完新世最大海進時の沖積面の下位に4面の沖積面を認めた。 ・ 最下位面は能代地震(1694)の際に隆起した範囲と概ね一致する。 ・ 沖積面の隆起は傾動と撓曲とを伴っており、隆起量に累積性が認められることから、完新世隆起地形の可能性が高い。	完新世の活動履歴を把握し、最新活動時期、単位変位量、再来間隔を評価する。 (約8,000年前～現在) ↓ 各沖積面の沖積層の層相・年代を確認・対比し、地形面の形成過程を明らかにする。	ボーリング	15～20m×5本 (計90m)	ボーリングとジオスライサーとを組み合わせ、各面2箇所以上、グリッド状に配置し、沖積層の構造を3次的に明らかにする。 ボーリングは沈降側に、ジオスライサーは隆起側に配置する。
			ジオスライサー	10m×8箇所 (計80m)	
B 浅内沼地区	《能代断層本体》 ・ 地表踏査により基準となる中位段丘面に変位(撓曲)を確認した。 ・ 隆起側の上昇速度は0.2-0.5m/1000年の範囲にある。 ・ 沈降側が沖積面下に埋没しているが、反射法探査によれば0.4-0.5m/1000年程度と推定される。 《逆向き断層群》 ・ 地表踏査により基準となる段丘面に変位(撓曲・断層崖)、断層露頭を確認した。 ・ 断層崖の比高やテフラの変位量から推定した変位速度は概ね0.1-0.2m/1000yで能代断層本体より小さい。	更新世後期以降の真の変位量を確認し、平均変位速度を評価する。 (10数万年前～数万年前) ↓ 隆起側と沈降側とに適用しうる基準地質層序を設定する。  沖積層の層相を確認・対比し、沖積面形状(中央部の凹み)が撓曲の反映か否かを確認する。  H12年度の2測線(東西方向)の反射面を対比し、断層の性状や平均変位速度の評価の精度を上げる。	火山灰分析 放射性炭素年代測定 微化石分析 花粉分析	合計10試料程度 合計30試料程度 合計15試料程度 合計15試料程度	年代既知の広域火山灰と対比して年代決定 沖積層の年代決定 沖積層の年代・堆積環境決定 沖積層の堆積環境決定・年代推定
			ボーリング	3本、計240m 隆起側:① 50m 沈降側:② 80m # :④ 110m	反射法探査測線沿いに配置。 中位段丘(MD)面上、Toya、潟西層基底を確認。 沖積面上、Toya、潟西層基底を確認。 沈降側新期砂丘上、Toya、潟西層基底を確認。
			火山灰分析 放射性炭素年代測定	合計15試料程度 合計15試料程度	年代既知の広域火山灰と対比して年代決定 沖積層の年代決定
			ボーリング ジオスライサー	沈降側:③ 20m 10m×1箇所 (計10m)	沖積面上、沖積層の層相確認。 沖積面上、沖積層の層相確認。
C 米代川南岸地区	《能代断層本体》 ・ 米代川南岸の完新世最大海進時の沖積面に幅約1.5km、高度差2.2～2.3mの撓曲が確認された。 ・ 既往土質調査結果によれば、沖積層中には上位より毛馬内、鳥越、高市と呼ばれる軽石層が確認されている。	最終氷期以降の活動履歴の把握し、単位変位量、再来間隔を評価する。 (約3万年前～現在) ↓ 沖積面下の堆積物中に時間基準面となる鍵層(火山灰)を確認し、変位量や変位の累積性を評価する。	既往反射法探査再解析	測線長約7km、南北方向	H12年度の2測線(東西方向)の両方と交差する既往探査測線を選定する。
			ボーリング	3本、計190m 隆起側:① 80m 隆起側:② 50m 沈降側:③ 60m	沖積面上、高市軽石(25,000年前)を確認。 沖積面上、鳥越軽石(12,000年前)を確認。 新期砂丘上、
			ジオスライサー	10m×5箇所 (計50m)	沖積面上、毛馬内軽石(1,100年前)・泥炭層を確認。
		火山灰分析 放射性炭素年代測定 微化石分析	合計20試料程度 合計15試料程度 合計10試料程度	年代既知の広域火山灰と対比して年代決定 沖積層の年代決定 沖積層の堆積環境決定・年代推定	

\* ボーリングの番号(①、②、③、④)は図7-1 調査計画図上のボーリング位置に付した小さい番号に対応。